

歴史が語りかける人間の 英知と愚昧

今こそ時代と真剣に向き合うとき

自らの戦争体験を原点に、激動の昭和史、さらにそれに先立つ大正・明治の歴史を、人間に対する深いまなざしをもって語り続けてこられた作家の半藤一利氏。昨年起きた東日本大震災後の

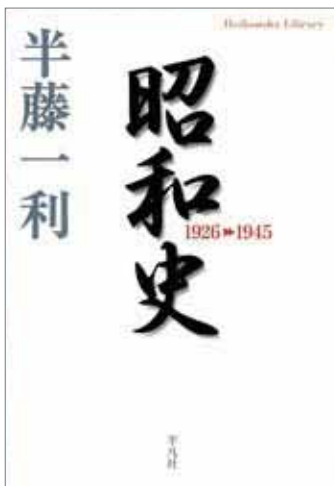


作家・歴史探偵

半藤 一利氏

(プロフィール はんどう・かずとし)

1930年東京生まれ。東京大学文学部国文科卒業後、53年(株)文藝春秋入社。編集者として伊藤正徳や司馬遼太郎などの作家を担当し、太平洋戦争当時の政治家・軍人などの取材に奔走する。『週刊文春』『文藝春秋』編集長、同社専務取締役を経て、歴史探偵として執筆活動に専念。著書は『日本のいちばん長い日』『漱石先生ぞな、もし』(新田次郎文学賞)、『ノモンハンの夏』(山本七平賞、以上文藝春秋)、『幕末史』(新潮社)、『隅田川の向こう側 私の昭和史』(創元社)など多数。『昭和史1926-1945』『昭和史 戦後篇』(平凡社)で毎日出版文化賞特別賞を受賞。昨年、最新刊『聯合艦隊司令長官 山本五十六』(文藝春秋)を刊行。





新日本製鉄(株) 代表取締役会長

三村 明夫

「絶対」とは言うまいと 誓った東京大空襲

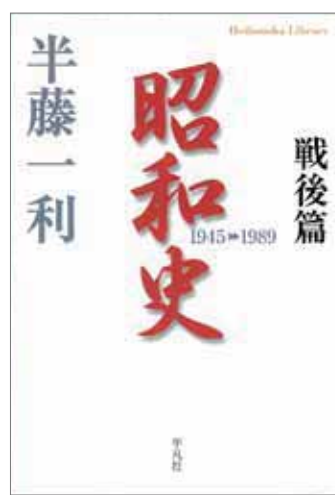
さまざまな問題も、その根底には「根拠なき過信」という太平洋戦争当時と共通の課題があると指摘する。日本人は今、直面する課題にどのように向き合っていくべきなのか。今年の新春対談では、歴史から学ぶことの大切さ、歴史の教訓が示す日本のあるべき姿などをテーマにお話を伺った。

三村 今年の新春対談では、私たちが生きた「昭和」という時代をテーマに、日本人に対する深い洞察をもって、歴史の真実とその教訓を語り続けてこられた、作家の半藤一利さんをお迎えしました。私もいくつかの著書を

拝読しましたが、この対談の準備期間だけでは読み切れないほど数多くの著作をお持ちです。本日は歴史の面白さや学ぶべき教訓、日本の進むべき将来など、幅広いテーマでお話を伺いたいと思います。ご出身は東京の墨田区向島ですが、どんな子ども時代を過ごされましたか。

半藤 私が生まれた向島界隈は、まあなんとも上品さのかけらもないような下町で、一年坊主のとき、夏の暑い日に、裸で作業しているヨイトマケ(※1)の人たちに「お

ベストセラーとなった『昭和史』。半藤氏が編集者4人に対して行った寺子屋授業がまとめられて本書となった



東京下町の向島で少年時代を過ごした半藤氏。夏休みのラジオ体操の後、近所の悪ガキ仲間たちと腕を組んだ三人の向かって右が半藤少年

出典：『くいま』2009年9月号(文藝春秋)

※1 ヨイトマケ 大きな石を使って建設現場などで地固めをする作業者のこと。重量物を滑車で上げるとき「よいとまあけ」というかけ声をかけたことから、そう呼ばれるようになった。

じさん、素っ裸になつていいのか」と聞いたら、「素っ裸じゃねえっ。手ぬぐいを肩にかけてらあ」と。それを真似して服を全部ランドセルに入れ、肩に手ぬぐい一本かけて素っ裸で家に帰ったら、母親からこっぴどくやられました。始末に負えないとびっきりの悪童でした。

三村 昭和20年3月10日、14歳のときに東京大空襲を体験し、火の海を逃げまどい多くの人の死を見つめられた。

半藤 さすがの悪童も愕然としました。最後は川で溺れかけて船上から襟首をつかんで引き上げてもらい、何とか助かりました。幸運としか言いようがない。当時は「絶対日本が勝つ」とか「絶対神風が吹く」など「絶対」という言葉が周りに溢れていましたが、九死に一生を得て焼け跡に茫然とたたずんだとき、金輪際「絶対」という言葉は使うまいと思いました。

三村 その体験が今日までの作家活動の原点になつているように思いますが、空襲後に疎開され、その後、高校・大学へ進学して出版社に入社された。悪童からの変貌ぶりには何かきっかけがあつたのですか。

半藤 東京大空襲で「一念発起して昭和史研究を志す」と言えばカッコいいんですけど、悪ガキ育ちでそんなやえた頭の持ち主じゃありません。疎開した親父の故郷の新潟県長岡は、秋から春先にかけて雪の中に埋もれて何もすることがない。もともと英語には興味があり、暇なので勉強したら成績もぐんぐん上がり目立つ生徒になつちやいました。先生の薦めもあつて進学することになりました。ついでにこのころからかなり本も読むようになりましね。

旧制浦和高校入学から東京大学卒業まではボートに熱中しました。と言ってもボートほど虚しいものはありません。漕げども漕げども艇は進まず腕も上達しない。でも大学4年のときに全国優勝を果たして、この時期に一

つのことを地道に根気強く、我慢して続けることの大切さを学んだと思います。

三村 まさに「継続は力なり」ですね。そのときに養われた気力が、史料を繰り返し徹底的に検証する今のお仕事にもつながっているんでしょうね。

昭和史への興味、生まれた使命感

三村 半藤さんは日ごろから歴史に学ぶことの大切さを伝え、日本人が歴史に学ばないことに警鐘を鳴らしておられます。歴史、中でも昭和史に興味を持ったきっかけは何でしょうか。

半藤 焼け跡で「何故こんな戦争をしてしまったのか」「この国は一体どういう国なのか」と漠然とした疑問を持ったものの、社会人になるまでそれほど強い思いはありませんでした。本当は新聞社の社会部記者になりたかったんですが、ボート部の縁で文藝春秋に入社し、ベストセラーになつた『連合艦隊の最後』の著者で、後に時事新報社長を務められた伊藤正徳さんの編集担当となりました。ある日、伊藤さんのお宅で、お座敷天ぷらを御馳走になりながら、当時を知る元海軍提督の方などから艦隊戦力が壊滅した「レイテ沖海戦」の体験談や裏話などを聞き、それが大変面白かったのがきっかけだったかもしれません。

自分自身でもその時期の戦争で生き残った方への直接取材をもとに、『週刊文春』に「人物太平洋戦争」という連載を書きました。後日、亡くなる前に伊藤さんが病床でそれを指差し、「いい仕事をしたね。もったいないからこのまま続けなさい」と。その言葉を遺言と思って太平洋戦争にこだわってきました。

三村 昭和38年『文藝春秋』8月号に掲載された、大戦時



一つのことをやり通す大切さを学んだボート。写真は東京大学ボート部時代（左端が半藤氏）

出典：『つりま』2009年9月号（文藝春秋）



1963（昭和38）年『文藝春秋』8月号掲載の大座談会の記事。座談会には当初、30人が出席する予定だったが、吉田茂は後日誌上参加し、町村金五（当時北海道知事）は議会のため欠席した。2007年『日本のいちばん長い夏』（半藤一利編、文春新書）として出版

に政治や軍部の中枢にいた人、前線の将兵、銃後の人たちなど28人を集め、終戦の日を語り合う大座談会「日本のいちばん長い日」が大変印象に残っています。

半藤 あの大座談会では、皆さん当事者でありながら自分のことで精一杯で、終戦の具体的事情や自分たちの国の歴史がどう動いていたのかよく知らないことがわかった。そのときに、これは今のうちに終戦についてエピソードや裏話を集めておいたほうがいいと気づいて、翌年当時34歳で本業の『文藝春秋』のデスクの傍ら、出社前の朝4時に起きてフウフウ言いながら、『日本のいちばん長い日 運命の八月十五日』を書きました。そのときは「お前の名前じゃ売れない」からと、大宅壮一編で出版されました。

歴史は過去と向き合い、 過ちに学ぶ人間学

三村 私は終戦時5、6歳で、その後、小中高校と学ぶ中で昭和史はあまり教えてもらえず、大学入試でも出題されませんでした。中国・韓国では組織的にきちんと当時の歴史教育を行っています。日本の学生は昭和の激動期の歴史を知らない。今を生きる日本人として、戦時中の軍部や官僚、政治家、国民がどのように大戦に突き進んだのかという史実を絶対に知っておくべきだと思いますね。

半藤 おっしゃるとおりです。終戦後の12月にGHQ連合国総司令部(※2)からの指令で日本の教育から昭和史が除外されましたが、ようやく10年ほど前から近現代史もしっかり教えるようになった。でもそれまで習っていないので教える先生がいません。

歴史は人間がつくるものです。人間がいつどのような

判断をして、いかなる過ちを犯したのか。歴史には、人間の英知や愚昧、勇気と卑劣、善意と野心のすべてが書き込まれている。歴史を考えることは人間学に通じる。日本人の精神構造を知る上でも、歴史から学ぶことが大切です。中でも昭和は私たちが生きた時代です。特に大戦前後の約20年間には、熱狂しやすく独善的で、正面から危機に向き合わない日本人の姿など、学ぶべき数多くの教訓が詰まっています。

また、昭和史を理解するためにはどうしても大正、明治と歴史を遡って検証しなければならぬので、最近の日露戦争についても調べています。当時の日本と帝政ロシア、太平洋戦争が始まるときのアメリカとの国力の差はどちらも1対10です。しかし前者では無駄な戦いをしなかったのに、後者では昭和12年の「盧溝橋事件」(※3)を発端に戦火が拡大し、「日独伊三国同盟の締結」(※4)でもはや引き返せなくなった。なんとも愚劣な戦いをしたものです。その差は何か。明治時代には日本の国力や日本が置かれた世界の情勢を国民に知らせ、ロシア討つべしという熱意を政府・軍部・国民全体が共有したことで、国民戦争たり得た。一方、太平洋戦争は国民が何も知らないうちに、戦争に突き進んだという違いがありますね。

三村 率直な疑問ですが、明治時代には賢かった日本人がたった数十年でなぜ愚かになったのでしょうか。

半藤 私もなぜだろうと思います。私なりの考えですが、文化も技術もまったく違うものに直面したとき、その断絶との向き合い方が大切です。江戸時代に一つの文化体系を持っていた国民が開国によってすべてが変わる大きな断絶を味わいましたが、明治の人たちはそれに真剣に向き合い、どう乗り越えるのかを本気で考えた。司馬遼太郎さんが近代国家の夜明けと勃興期を描いた『坂の上の雲』のあとがきで、これは楽天家の物語である、と書いて



『日本のいちばん長い日 運命の八月十五日』(大宅壮一編、文藝春秋、1965年)。出版の翌年に映画化され大ヒット。その後、英語やフランス語、朝鮮語、ヒンディー語などに翻訳され、海外でも反響を呼んだ。1995年に半藤氏の著書として再刊行された(写真、文春文庫)

※2 GHQ連合国総司令部 1945(昭和20)年に連合国によって設置された対日占領政策の実行・管理機関で、戦後の司法・立法・行政・教育などの改革を主導した(間接統治)。1952(昭和27)年のサンフランシスコ講和条約発効により廃止。

※3 盧溝橋事件 1937(昭和12)年7月、北京郊外の盧溝橋周辺での銃撃をきっかけに日中両軍が交戦した事件。以降4年半におよぶ泥沼の日中戦争では、1941(昭和16)年の真珠湾攻撃までに、実に100億円の戦費が投じられ、45・6万人もの日本兵が戦死することとなった。

※4 日独伊三国同盟 1940(昭和15)年9月に日本・ドイツ・イタリア間で結ばれた同盟。アジア太平洋地域支配の正当化と、当時中国を巡り対立していたアメリカとの戦争を抑止し、日中戦争を有利に処理する思惑があったが、逆にアメリカは態度を硬化させ、日米の衝突は不可避となった。そこには軍部の自分勝手な読みがあった。

ていますが、当時の誰もが自分のやっている仕事は国のため、人のためになるという確信を持っていました。日露戦争の直前に創業した官営八幡製鉄所も、戦争を目前にして「国のため」という大義があったと思います。その辺りがずる賢くエゴイステイックになった昭和の人間とは違うんですね。

三村 明治時代の人たちは、維新後に外国文化が流入したとき、誰もが悩みながらも真正

面から文化の衝突と向き合い解決の努力をしたということですね。

半藤 直接会ったことはありませんが、家内の祖父である夏目漱石は作家として、時代と常に真正面から向き合っていました。例えば『吾輩は猫である』の中に日露戦争が山ほど出てくるし、『坊ちゃん』にもその時代の描写がある。また、明治43年に書いた『三四郎』の有名な話として、三四郎が日本の発展を感じて意気揚々と上京する際、前に座った紳士が、全て西洋のお仕着せで日本人が本気でつくったものは何もない、このままじゃ日本は亡びるねと言った一場面だけを見ても、日露戦争後の日本の墮落を見通しています。『門』までの作品を読むと、文明批評家として漱石は卓抜した作家だったと感じますね。

しかし、大戦前の大正から昭和にかけて多くの人たち



は、日露戦争で勝った栄光だけが後光が差したように輝いて、大きな断絶に直面していない。あとは情性だったように思います。

40年周期説。 第二の滅びを迎えないために

三村 半藤さんは大戦の教訓として、「国民的熱狂」「希望どおりに物事が動く」という思い込み」「参謀本部に見るタコツボ的小集團主義の弊害」「国際社会

での日本の位置を把握しない主観的思考による独善」「対症療法的に成果を求める短兵急な発想」の5つを挙げられています。企業経営においても、こうした無責任や過信があれば、その会社は必ず潰れます。企業経営の視点から見ても歴史は学びの宝庫だと思います。

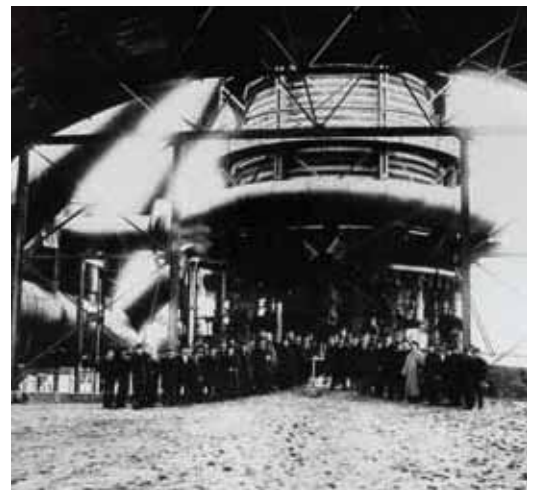
半藤 そうした問題意識を持つ企業は大丈夫です。大戦前後で言うと、昭和14年に起きた「ノモンハン事件」(※5)での参謀本部内の行動がわかりやすい。日本が兵力を出してもドイツ軍への対応に忙しいソ連は出兵してこないのではないかとという参謀本部の誤った読み、つまり「起こって困ることは起きないんじゃないか」と思い、それがいつの間にか「絶対に起きない」と考えるようになる。これこそ根拠なき過信です。それによって多数の死者を出す悲劇が生まれ、しかもその事実の詳細は参謀本部の



半藤氏が描いた夏目漱石のイラスト。漱石は作家として時代と真正面から向き合った



日本の近代化を支えた官営八幡製鉄所。写真は東田第一高炉火入れ式(1901年)



少数にしか伝えられなかった。

昭和末期の日本も、バブル経済、政・官・財の馴れ合いの中で、どういう国にするかという国家ビジョンもなく浮遊し、バブル崩壊後に日本人がやったことはノモンハンと変わりません。財政は大借金を抱え、少子化に気づいても長い間無策だった事実を見ると、戦中に見られた驕慢なる無知、底知れぬ無責任、組織を守るためにしか動かないタコソボ主義という同じ過ちを繰り返しているような気がしてなりません。

三村 繰り返すという意味で、半藤さんは明治以降、現在までの日本の歴史には「40年周期」があると指摘されていますね。

半藤 近代日本の国づくりの過程を見ると、1865年の開国（※6）から日露戦争に勝利し「近代日本」を築いた1905年までが「第一の国づくり」の時期。

その後世界中を相手に戦った太平洋戦争敗戦（1945年）までが「第二の滅び」の時期。つまり開国から40年で築き上げた近代国家を同じ40年間で焼け野原にし、多くの国民の命を失った。そして戦後、講和条約で主権を回復（1952年）してから高度成長を遂げ40年間で「経済大国」となる「第二の国づくり」を進めたものの、昭和が終わって

平成を迎えた時期にまたいい気になって泡のような繁栄がはじけ飛んだ（1992年）。平成の失われた20年を経て、昨年東日本大震災に見舞われました。次の40年の折り返しを迎えた今、第二の滅びとならないために、国民一人ひとりが歴史に学び真剣に考えなければならない時期だと思います。

三村 震災・原発問題では、大戦時と同様に自分勝手な根拠なき過信があり、その結果起きた災害に対して想定外という言葉が使われています。そのことも含めて、今回の震災・原発問題についてどのように考えていますか。

半藤 昭和29年に起きた「第五福竜丸事件」※7を通じて、核兵器はそれをつくったアメリカでさえわかっていないのだと知り、私はそれ以来核兵器廃絶論者です。一方原子力の平和利用については、あれだけ科学者が口をそろえて大丈夫だと言うのだからできるかもしれないと思っています。しかし今回の震災後の対応を見て、結局未だに人類は原子力に対する制御法を手に入れていることを痛感しました。かつて湯川秀樹さんが「廃棄する技術を手に入れるまでは原発を使つてはならない」と言われたことを思い出しましたね。

「第二の敗戦」とも言える今回の震災でも、安易な楽観主義や無責任、唯我独尊、殻に閉じこもつ

右はノモンハン事件のさなかソ連兵（モンゴル人）の監視下に置かれた日本軍捕虜。左は東日本大震災で大津波が押し寄せる釜石市内。次の40周年の折り返しを迎えた今、国民一人ひとりが歴史に学ばなければならないと半藤氏は語る



写真提供：岩手日報社「平成の三陸大津波」

※5 ノモンハン事件 1939（昭和14）年5月、満州国とモンゴル人民共和国の国境線で勃発した日ソの軍事衝突。宣戦布告をしたわけではなく単なる国境紛争であったが、両軍で約4万5千人の死傷者を出す凄惨な戦いとなった。9月の停戦後、その反省として「精神力の強化」ばかりが謳い上げられ、火力の差など真の教訓・反省を活かすことなく大戦への道を突き進んだ。

※6 半藤氏は、1853年ペリー来航、1854年日米和親条約、1858年修好通商条約の後、1865年京都の朝廷が国策を変更して開国を決めたときをもって、近代日本のスタートと考えたほうがよいと指摘している。

※7 第五福竜丸事件 1954（昭和29）年3月、太平洋沖のビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験（爆発力は広島原爆の千倍以上）。放射性降下物が指定された危険区域をはるかに越えて広がり、まぐろ漁船「第五福竜丸」の船員全員が被爆した。

た小集団のエリート主義などが背景にあるように感じています。また、日本人が等しく被災地の立場に立っているのか、東北だけに任せていないかも疑問です。8月15日を迎えるたびに、無謀な戦争は二度とすまいと確認してきたように、3月11日を国民全員が新たな国づくりのスタートを確認する一つの節目にできるかどうかが問われています。

また、近代日本は常にエネルギー問題に直面しており、江戸時代には炭・薪・菜種だったものが、ペリーが来てから蒸気機関に必要な石炭、太平洋戦争では石油を争い、現在も原発のウランも含めて自国では賄えません。資源に乏しい日本が今後いかに自立していくのか、国民的合意を新たにつくり上げていく必要がありますね。

三村 エネルギー問題については、その質や量、安定性、コスト、そして大前提となる安全性を網羅的、客観的に検証していくことが必要です。その上で指摘のように、歴史的に日本人が直面してきたエネルギー問題の現実も踏まえながら、世間の風潮に流されることのない、エネルギーのベストミックスをつくっていくことが大切だと思います。

歴史のifと経営のif

三村 半藤さんは、作家とともに「歴史探偵」という肩書きを使われています。そこにはどんな思いがあるのでしょうか。

半藤 実は作家の坂口安吾さんの造語なんです。入社後すぐに安吾さんの原稿取りを命じられましたが、なかなか原稿を書いてくれない。1週間お宅に泊まったとき、夫人の手料理で毎晩酒を飲みながら歴史の話をしてくれました。「歴史は史料をいくら並べても本当のところはわ

からない。史料と史料の間の「行間」を読む。別の史料を置いたりしながら人の心の問題まで想像力を発揮しないと、本当の意味で史料は読めないし全容は見えない。だから俺は歴史探偵なんだ」という言葉を覚えていました。安吾さんの許可を得たわけじゃありませんが、その1週間で歴史解釈の多様性や「歴史探偵学」を教えられた自分、安吾直伝の弟子だと言っています（笑）。今でも歴史を書くとき、史料と史料を重ね合わせて、その行間にはごく常識的な推理を入れていますね。

三村 相当の知識・情報がなければ的確な推理は難しいと思います。ただビジネスの世界でも推理、仮説は重要ですが、決断を下すときに必要な情報は意外と少ない。足元の経済状況などの理解は情報が限られていて特に難しいのですが、その条件の中で適切な「if」、つまり仮説を立て、迅速な経営判断を行っていくかなければなりません。どのような仮説を立てられるかは経営者の資質。さらにその仮説も一つではなく、事態の推移を見ながらどれが正しいのか自分の考え方、判断を重ねていくプロセスが重要です。そういう意味で私は「ビジネス探偵」だと思います（笑）。

危機に立ち向かう「悠然たる風格」を

半藤 指導者の資質としても一つ大事なものは、進めるプロジェクトの意味を部下全員にきちんと説明して周知徹底させておくことですね。山本五十六海軍大将※は自分の反対する戦争の先頭に立たなければならなかった悲劇の英雄ですが、越後長岡生まれで口が重いせいもあり、戦争の主導権を失うきっかけとなった「ミッドウェー海戦」において、その作戦が何を意図しているのかをまったく部下に説明していない。あれを周知徹底していれば



坂口安吾（1906～1955年）。ご自宅で晩酌を共にしながら、歴史解釈の多様性や「歴史探偵学」を学んだ
出典：「くりま」2009年9月号（文藝春秋）



半藤氏が原作・監修を務めた「聯合艦隊司令長官 山本五十六―太平洋戦争70年目の真実―」（全国ロードショー上映中）。歴史に翻弄された山本五十六の苦悩に満ちた半生を軸に、激動の時代に生きた日本人の姿をリアルかつダイナミックに描き出している

※8 山本五十六（1884～1943年）新潟県長岡生まれ、大日本帝国海軍連合艦隊司令長官。ソロモン戦線での視察飛行中に戦死するまで、太平洋戦争前半の攻勢作戦での総指揮にあたった。航空兵力や資源の不足を予見して「日独伊三国同盟」に真っ向から反対するなど、日米開戦を回避すべく努力した数少ない軍人。



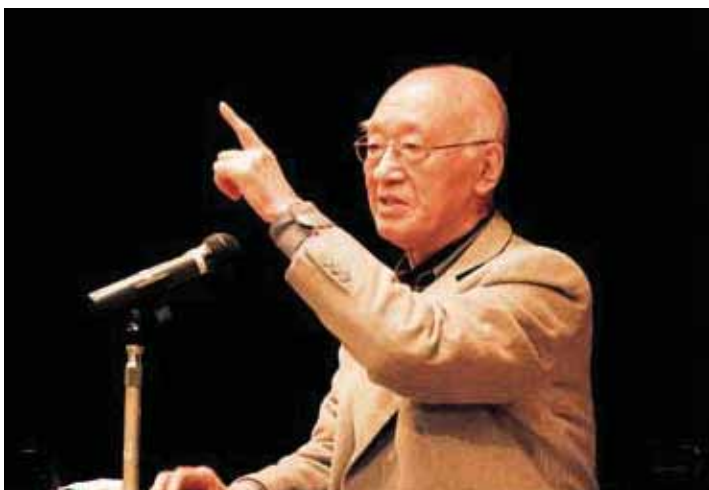
違う結果になったかもしれません。

三村 企業経営でも、経営者の意図を周知徹底することが重要ですね。例えば安全や品質、敵対的買収、競合者の出現など目に見えないことも含め、危機を予見して認識したときに、それを従業員と組織で共有しなければタイムリーな次のアクション、真正面からの根本的な対策を講じることができない。全員で危機を認識して共有するためには大変な時間とエネルギーを要しますが、そこをきちんとやらなければなりません。そうした意味で、政治家の危機意識のなさを含め今の日本に大きな危機感を抱いています。歴史家として現在の日本に対する注文があればお聞かせください。

半藤 まず政治家だけでなく、さまざまな分野でリーダーシップを持つ人、ひいては日本人総体のレベルが落ちていと感じますね。国民は、その国民にふさわしい政治家しか持ち得ないというのが実感です。今は日本だけでなく、アジア、世界を見る目が必要なので、とにかく若い人には勉強してもらいたい。国家を建て直す上で教育が最も重要だと思いますし、それを実行すれば5年たつたとき日本は変わることができるはずです。これからの日本と日本の将来を担う若い世代に必要なのは、「無私の気持ち」「組織などの小さな箱から出る勇氣」「大局的な展望能力」「世界に通用する情報・知識」、そして吉田松陰の言葉にある「君は功を成せ、われは大事を成す」という「悠然たる風格」です。

三村 今後、存在感ある国として日本が発展していくためには、国民一人ひとりが危機意識を持って真剣に考えていくことが大切ですね。本日は示唆に富むお話をいただきありがとうございます。

（この対談は2011年10月27日、当社南平台公邸で開催されました）



自ら「講演嫌い」と語る半藤氏も、若い世代に向けた講演会は積極的に引き受け、歴史の教訓を語り続けている



映画のワンシーン。写真左が山本五十六役の役所広司氏（聯合艦隊旗艦「長門」にて）